

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 20号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内
TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



「20年前の回顧から」

北関東教区主教 ゼルバベル 広田勝一

わたしが「日本聖公会婦人会」に本格的に関わったのは、20数年前、日本聖公会婦人会の役員担当が北関東教区に移った時からです。当時、教区常置委員長の任にありましたが、八代崇主教から「日本聖公会婦人会チャプレンを引き受けてくれ、よろしく頼む」との一言で足を踏み入れました。状況は、多少理解していました。日本聖公会においては、祈祷書の確定、また法憲法規改正、さらに正義と平和委員会を基盤とした女性が教会を考える会等の動きの中で、日本聖公会婦人会も新たな局面に立たされつつも、内部改革を進めることを決議した直後でありました。当時の会長今村さだ子姉は、二つの特別委員会を抱え、尽力されました。ひとつは「日本聖公会婦人会を考える会」（委員長塩田純子姉）、もうひとつは「感謝箱献金委員会」（委員長速水昌子姉）です。今後の婦人会に関してのあり方をめぐって白熱した議論が続きました。わたしは、二つの委員会のための特祷を作成し、広く代祷を求めました。三年後の総会で、これまで詰めてきた感謝箱献金を中心とする組織改正の議案は、否決されました。長いようで短かったチャプレンの任期も終わり、多少の開放感もありましたが、役員の皆さんは意見の相違を超えて、お互いの絆を深め、今でもその交わりが、天上にある方も含め、続いております。

日本聖公会婦人会は、今年で創立123年になります。では今も婦人会の中に脈々と流れている根本精神は、何でしょうか。それは祈りと感謝にあります。信仰生活における自然な出来事としての祈り、身近な祈り、家族・親戚・友人、あるいは隣人・町内の人たち、また教会・教区の人たち、また私たちの国・世界、これらを覚えて祈ることの大切さを覚えます。さらに伝道に直接携わっている教役者を覚えて祈っていく、こうした祈りです。

私たちの歩みは喜びばかりではありません。しかし困難な中にも神は共におられます。私たちの命の源は神であります。ふとこうした神の恵みに気づいていく、ここに感謝がうまれます。その具体的行動として献金をささげる行為、これが長年「感謝箱献金」として展開されてきました。祈りと感謝、これが婦人会の根幹であり、まさに信仰生活そのものであります。

近年、教会、教区では婦人会という表現よりは、女性の会などと称されたりすることもあります。123年間の婦人会の歩みは、先ほどの、祈りと感謝を根幹に据えつつ、名称は変わろうとも、変わるこたない祈りと感謝を大切にしてきたと言えましょう。

2015 年度 感謝箱献金

会長会にて決定しました！



日本聖公会婦人会は3年に1度、総会を開催し、間の2年は全国10教区の代表による会長会が開かれ、報告の承認と議案の可否が決められます。今年は、第24(定期)総会後第2回会長会が京都教区センターにおいて、6月17、18日の両日行われ、議案として提出された7つの団体はすべて「感謝箱献金」のお献げ先として可決されました。お献げ先は、海外で活動している4つの団体(役員会・感謝箱献金運営委員会より議案提出)。名古屋市と岐阜県可児市近郊に暮らすフィリピン人とその家族を支える活動を続けている2つの団体(中部教区より議案提出)。及び、北関東教区からは、入管センターでの面会支援による難民と移住労働者を支える働きを担う団体です。

なお、議案としては提出されませんでした。が、「東日本大震災支援積立金(年額50万円)」の最終年としての承認がなされ、「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト・リフレッシュプログラム」(昨年の会長会で承認済み)への継続支援についても承認されました。(感謝箱献金と上記の震災積立金からの併用支出)

議事後、「管区・女性に関する課題」を管区女性デスクの木川田道子姉、ニューヨークの会議に出席された池住圭姉より、「国連女性の地位委員会」の報告を聴きました。

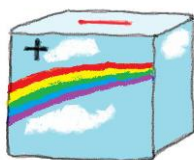
18日は、聖餐式の後、「原発問題プロジェクトの活動報告から」というテーマで、管区として今後も活動が続ける福島の実状と、問題について池住圭姉よりお話をいただきました。

今年度のお献げ先の紹介は4ページ以下に掲載しています。その他の協議事項につきましては役員会発行の「会長会決議録」、「ニュースレター」をご覧ください。

感謝箱献金事務局 運営委員長 古谷美子

感謝箱献金お献げ先の原則(基本姿勢)

1. 日本聖公会婦人会に送金された感謝箱献金は、社会のしくみの中で生命や存在を危うくされている国内外の人々、特に女性や子どもたちの自立をめざすための働きに献げる。
2. 献金を送るだけでなく、お献げ先の人たちと互いの顔が見える関係を築いていく。
3. 緊急の援助が生じた時は、原則によらず、1件につき50万円を限度として、役員会とコア(感謝箱献金事務局)とで協議し、決定し支出できる。
4. 各教区からの日本聖公会婦人会への送金は感謝箱献金総額の2分の1以上とする。



2006 年 第21(定期)総会後第2回常議員会にて決議

主の平和がありますように

日本聖公会婦人会 会長 前田伸子

4月25日の午後、M7.8のネパール大地震が発生しました。カトマンズを中心に甚大な被害を及ぼした巨大地震の報道をテレビで見て、あまりの悲惨さに愕然としました。

そして同時に、4年前の東日本大震災により大きな犠牲を強いられた方々のお苦しみ、新たに私たちの心によみがえりました。

まず私たちができることは、「ネパール大地震で、傷つき、悲しみ、途方にくれておられる被災されたお一人一人に、神さまの癒しと慰めがありますように」と、お祈りすることでした。

それと共に、被災者の方々に一日も早く、皆さまから祈りと共に寄せられた大切な感謝箱献金をお届けしたいと考え、震災直後のネパールの混沌とした状況の中で、被災された方々に、献金が間違いなく届き、支援できる方法がないかと模索いたしました。

そのような状況の中で日本聖公会「管区だより」から、管区に「ネパール大地震被災者支援献金窓口」が開設され、集約された献金は、NCCを通してACT (Action by Churches Together) アライアンスとシンガポール教区のACROSS (Anglican Crisis Relief, Outreach and Support, Singapore) へ、1/2ずつ送金されとの情報を得ました。

これで、被災された方々に間違いなく支援できると確信し、役員会と感謝箱献金運営委員会で協議のうえ、「感謝箱献金緊急支援金」から50万円を送金いたしました。

ネパールは雨期に入り、テントでの生活や衛生状況が心配されます。被災された方々に多くの支援の手が届き、神さまの癒しと慰めが限りなくありますよう、みなさまと共に祈りたいと思います。



絵：三原晶子

神の悲しみ

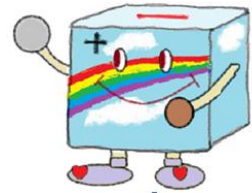
世界の平和と正義実現のため、いつも礼拝の中で祈りますが、毎日世界のどこかで、争いがあり戦争があり、日本の中でも不条理で悲惨な出来事が後を絶たないのです。そのような中で、いつも犠牲になるのは、弱者、小さき者たち、女性や子どもたちなのです。イエス様の時代にも、そのような小さき人々、失われた人々があり、彼らの心に寄り添われたのが、主イエス様です。

「神の悲しみ」という言葉は、北関東教区の今は亡き、大久保直彦主教遺稿集のタイトルであり、大久保主教は、旧約聖書のテーマは神の正義であり、神の正義とは、言い換えれば神の怒りである。そして主イエスは怒りを超えた、神の悲しみを表しているとおっしゃるのです。いずれにしても、それは神の愛の現れであり、「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された」のです。

「怒り」と「悲しみ」という思いを胸に抱きつつ、日々を過ごす私たちは同時に、そのような中でも「喜び」を与えられるのです。私たち自身が、親の信頼を裏切る放蕩息子であるという認識に立つ時、父なる神の「怒り」とそれを超えた深い「悲しみ」、そして帰って来た息子を迎える「喜び」を少し理解できるのではないのでしょうか。

チャプレン・司祭 ヤコブ 三原一男

2015 年度 感謝箱献金お献げ先



全国の婦人会の皆さまから 2014 年に寄せられた、感謝箱献金は約 258 万円でした。お献げ先について第 24(定期)総会後第 2 回会長会において審議され、今年度は 9 つの団体(継続 2 つ)にお献げすることとなりました。また、ネパールで起きた大震災の支援のため、日本聖公会管区を通して、別途 50 万円を緊急支援として献金しました。

リグリマ・ジャパン

—バングラデシュの少数民族ガロ族の女性の支援—



2014 年に開催「リグリマ 10 周年」会議の様子

バングラデシュの「少数民族ガロ」の女性たちへの支援。蔑視や就学・就労の機会不均等にさらされている女性たちの、地位向上と経済的自立、差別の撤廃、尊厳の回復、弱者が安心して暮らせる社会の実現を目指して、現地と日本の女性たちによって設立され、協働して活動を続けています。

リグリマとは団結・結束・協働を意味するガロ語。水害などの自然災害が頻発する地域にあってインフラ整備も後回しにされている現状が続いています。2014 年には「リグリマ」10 周年記念式典があり、感謝箱献金スタッフが出席し現地を視察。日々の喜びを取り戻そうと努めるガロの女性たちにとって、感謝箱献金が大きな励みとなっていることを実感しました。技術を習得し家計の助けとなる裁縫教室の他、タンパク源として欠かせない魚の養殖池の再掘削、健康被害を減らすための改良かまどの設置・修理などの支援も必要と思われ、今年度は 25 万円をお献げしました。

ニームの会

—南インドの女性運動団体「WOLD」を支援—



南インドの農村に暮らすダリッド(元アウトカースト「不可触民」)の女性のための支援活動に励む「WOLD (Women 's Organization for Liberation and Development)」の働きを日本で支援している団体です。日本での物品販売やチャリティ・コンサートなどを開催し資金源としていますが、おもな活動資金は、世界祈祷日献金と感謝箱献金からなっています。

今年度は購入した土地で、キノコ栽培と有機野菜の栽培技術トレーニングによる習得を目指し、自立に向けての活動を続けていきます。ダリッド女性の尊厳の回復と経済的自立のためのトレーニング、種子購入などの費用に 10 万円をお献げしました。

サイディアフラハ

—ケニアの貧困地域に暮らす子どもたちへの支援活動—



ケニアの首都から 90 キロ離れたケテングラにあり、ケニア政府から NGO の認可を受けた、児童養護施設の運営を主な働きとする団体です。施設では極度の貧困から養育を放棄された子どもたちや、親を失い預けられた先では労働力として扱われる等、保護と養育が必要とされる女子を優先的に受け入れています。2014 年に「アルディ・ナ・ウペボ」から支援を受け開設した「地域自立センター」では裁縫訓練などで自立への手助けを行っています。また、エイズの知識や子どもの権利、児童労働に関するセミナーも開催し、母親や子どもたちに病気や暮らし、児童労働の問題についての知識と情報を伝える活動も行っています。経済成長がいわれるケニアにおいて、経済格差により厳しい貧困地域に暮らす女性と子どもたちの支援のため、今年度は 15 万円をお献げしました。

エルサレム教区「聖地ろうあ子どもの里」

—障がいをもつ子どもたちの学校とアウトリーチ活動(シリアからの難民支援)ため—



創立 50 周年記念の写真より

「聖地ろうあ子どもの里 - The Holy Land Institute For The Deaf」は、2 歳から 18 歳までの約 150 名の聴覚に障害をもつ子ども達の学校です。一般教養と将来の自立のための職業訓練が行われ、スタッフと生徒の強い絆のもとに今日まで障がいを抱える多くの児童を養育・教育し地域社会へ送り出し、ヨルダンの障がい児教育の重要な働きを担ってきました。子どもたちは、異なる宗教・国籍を背景に持ちながらも手話を介し互いに助け合い、小さな平和を

実践しています。近年、重複障がいのある子どもたちの受け入れにも力を入れており、支援の多様化とともに人員も必要となっていますが、ここ数年の食糧や燃料の高騰などにより、財政は逼迫した状況にあります。しかし、国の福祉の行き届かない地域には、専門的なケアを必要とする子どもたちがまだ大勢おり、支援の必要性がとても高いことから、アウトリーチプログラム(地域に向いての救済活動)の支援も行っています。その他にも、近隣国シリアから戦火を逃れてきた難民中にも障がいを抱え苦しんでいる人が多いことから、ザータリ難民キャンプでの、主に老人や子どもたちに向けての支援にもあたっています。いずれの活動も資金に窮し、常に支援金の呼びかけをお願いしながらですが、子どもの里の施設長ブラザー・アンドリュースは、施設の持つ専門性を生かし、積極的にサポートが可能なことに取り組むことで、地域や国全体が支援体制の整った平和な社会へと発展していくことに希望を置き活動を続けています。ヨルダンの障がい児を抱える児童とその家族、シリア難民の方々を憶えて、感謝箱献金から 45 万円をお献げしました。

中部教区「国際子ども学校」

—在名古屋のフィリピンの子どもたちの学校—



外国籍の親と日本で暮らしながらも、日本語と文化、習慣を身に付ける機会に恵まれていないフィリピン人の子どもたちに、地域の小・中学校に入学できるよう、言語や基礎学習を中心に指導しています。外国人労働者を取り巻く状況は特に経済面で厳しく、学費を払えない家庭も多く、補助金の必要性が高い現状です。文科省からの助成金が支給されないことも危惧されることから、教区からの財政的支援を広げつつ、

中部教区婦人会としても感謝箱献金よりの支援をお願いし、20万円をお献げしました。

中部教区「可児ミッション」

—移住労働者の家族と子どもたちを支える働き—



「可児ミッション」は、日本社会の中で懸命に働く移住労働者の方々のための祈りと交わりの場として2009年に開設。2013年には「可児聖三一教会」として再出発。ここでの礼拝はフィリピンの方たちの心のよりどころとなっています。その子供たちが公立小学校へ就学するための支援、未就学児の保育なども行っている。保護者の帰宅まで安全な環境で過ごせるよう保

育時間の延長を実施。ニーズが増え続ける中、日本の公的支援の届きにくい活動のために学費の補助、備品購入などに20万円をお献げしました。

「難牛連」難民・移住労働者問題キリスト教連絡会

—入国管理センターに収容されている外国籍の人たちをサポート—



移住労働者をとりまく諸問題を多くの人に伝え、特に不法滞在とされ、入管センターに収容されている方たちに面会支援を続け、支援している超教派のグループ。日本の難民認定率は非常に低く、難民申請者家庭に生まれた無国籍の子どもたちの正規滞在を求めている支援も行っています。家族分離収容におかれた人に、家族との連絡の手助けのためのハガキやテレホンカードの差し入れなどを行い、また、仮放免中に課

せられる様々な義務や規制により自由が束縛されている方たちのために、医療費、教育支援などの補助として15万円をお献げしました。

東日本大震災支援（積立）

—被災地に暮らす人々に寄り添う支援—



第23回定期総会の決議を受け、2011年より5年間毎年50万円を積み立てています。この中から、過去に南相馬の「原発事故から命と環境を守る会」、福島で開催された「変動する社会の中でフクシマの方々に心をこめて」（高木シスター講演）に支出しました。去年は「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」のなかの「リフレッシュプログラム」に、25万を支出。今年も続けて同額をお献げします（去年の会長会で承認済）。各教区・教会からも被災した人たちの支援プログラムに対し10万円を限度に申請を受け付けています。

リフレッシュ・プログラム（継続）

—原発と放射能に関する特別プロジェクト—



去年の会長会で、上記「積立金」からの支出の不足分（10万円）をお献げすることが、可決しているのを受け、本年度も原発事故により被災した地域の子どもの、心と身体の健康と将来の成長を願い、感謝箱献金より10万円をお献げしました。地域住民は今もなお放射能汚染に怯え不安な日々を送っており、多くの子どもたちが外遊びをできずにいます。未来への希望を持ち、元気づけられることを願い、放射能の

心配のない地域へ出かけ、自然に触れのびのびと過ごしてもらうための、バス旅行やキャンプの機会を持つための費用として用いられます。

感謝箱献金は
どなたでもご参加いただけます



- ❖ お友達やご家族に、感謝箱献金の働きを是非ご紹介下さい。
- ❖ 感謝箱献金便り「ガリラヤのほとり」を集いの場で読んで頂き困難のうちにある方々をお祈りにお覚え下さい。
- ❖ 所属教会での感謝箱の設置と管理にご協力下さい。

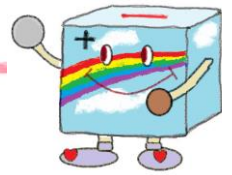
ご希望の方には機関誌や献金箱を郵送いたします。

感謝箱献金 事務局までご連絡ください。

↓↓↓

☎ 045-620-8282

e-mail : kansyabako@grace.ocn.ne.jp



2015 年夏 リグリマ裁縫トレーニング

「リグリマ・ジャパン」代表 上澤伸子

7月9～15日までバングラデシュの首都ダッカと北部の村において裁縫トレーニングを実施しました。婦人会感謝箱献金のご支援のおかげで、今回もトレーニングは大成功。参加者は新しい技術を楽しく学ぶことができました。大雨と悪路のなかを村まで行った甲斐がありました。村で開催された初心者講習会では、日本人指導員のK先生から新しくアップリケを習いました。初めにアップリケの基礎縫いを習ってから、次に、各自好きな形に切り取ったアップリケを、持参した布にすてきに縫いつけました。



アップリケの指導を受ける様子

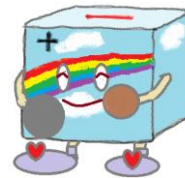
上級者からなるダッカの裁縫チームは、日本向けに製作したブックカバーやティッシュ・ボックス・カバーの品質管理について学んだのちに、新しく国内で販売する丸底の巾着袋をつくりました。K先生が20年前に勤めていらした手工芸品店へ、みんなで完成した巾着をもって売り込みに行きました。みごとに製品の質は認められたようです。あとは、わたしたちが帰国したあとに、現地のリグリマだけで、受注・生産・品物管理・納品などをマネージメントできるかどうかにかかっています。まだまだ道のりは長そうです。

婦人会感謝箱献金のご支援いただいた裁縫トレーニング開催は今回で5年目、7回目です。毎年、裁縫の初心者から経験者までさまざま人が参加しますが、回を重ねるうちに、独創的なデザインを作り出す人やビジネス・センスのありそうな人、ていねいな仕事ぶりの人、仕切り上手な人、こつこつと努力する人、他人の手助けをする人など、みなキラリと光る個性をもっていることがわかってきました。

わたしたちの裁縫プロジェクトは、これらの人材や、トレーニングをつうじて培ってきた技術、都市と村に住むメンバーたちのつながりを活かして、「リグリマ製品をつくる」という次の段階に移りつつあります。メンバーの間でもその機運が高まっています。初心者コースの閉会式では何人かの参加者から、家族の服を縫うだけではなく売れる物を縫って収入に結びつけたいという声が聞かれました。またダッカの上級者たちも、国内の手工芸品店に出荷するという明確な目標を得て、がぜんやる気が出てきました。

これからも、大またで進んで誰かを取りこぼしていくのではなく、リグリマらしく地ならしをするように、みんなでそろって進んでいきたいと思います。引きつづきご支援をよろしくお願いいたします。





「難キ連」事務局長 佐藤直子

暑中お見舞い申し上げます。皆様の暖かいご理解とご支援に心から感謝申し上げます。特に今年度も日本聖公会婦人会感謝箱献金助成金を賜り、弊団体の活動に大きな力と励ましを頂いております。誠に有難うございました。

さて、先日ご面会いただきましたネパール難民女性Bさんには、頂戴しましたご献金にて、下着3組、Tシャツ（半そで、長袖）3枚、七分スラックス、コーヒー、ティシュペーパーを購入し、さらに献品に頂戴しましたバスタオル、タオルを差し入れ満面の笑顔で喜ばれました。難民申請は受理されたものの、一回目の申請は不認定となっており再申請、仮放免も視野に入れて今後、名古屋の支援者を探したいと思っております。

また、6月面会しましたMさんにつきましても、テレフォンカード、現金、コーヒーを差し入れし、かなり複雑な家庭の状況聞き取りを、難キ連ボランティアの袴田さんと共に進めております。（名古屋在住の二人の男の子の児相保護も懸念。親の収容により子供の児相保護のケースが続いており、胸痛むケースも。お祈りください。）

このところ、名古屋、大阪方面に定住希望の被収容者が多くなっており、大阪茨木市の西日本入管センター閉鎖に伴い、居住地とは遠く離れた東日本入管センターへの移送が予想されます。

また、被収容者の高齢化も目立ち、疾病の重症化と共に、できるだけ頻繁な面会支援と支援機能への取り次ぎの必要を痛感しております。

9月15日には品川の被収容者面会のご協働、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆◆◆ 難キ連より、献品のお願い ◆◆◆

難民・移住労働者問題キリスト教連絡会（難キ連）は定期的な被収容者面会支援活動を行っております。また、収容を解かれ、仮放免中の難民申請者を始め、着の身着のまま日本にやって来た被収容者に衣類や日用品などの差し入れとともに、何よりも彼らの話に耳を傾け、精神的なケアを行っております。

どうぞ、私たちのとなりびとである、難民や入管被収容者の方々のための暖かいご支援とお祈りをお願い申し上げます。ご献品をお送りくださいましたすべての皆様に心から感謝申し上げます。

以下の物品を献品としてご支援ください

- * 金券（商品券、ギフト券、図書券、図書カード、クオカード、株主優待券など）
- * 未使用テレフォンカード 切手・ハガキ 便箋、封筒、ノート、文房具
- * シャンプー、リンス、石鹸、歯ブラシ、歯磨きなど（未使用品）
- * 古着（特にL、LL、XL…保管場所の都合から事務局までお問い合わせの上お送りください）



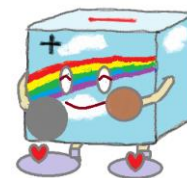
※現事務所の閉鎖に伴い 8月1日より、下記住所へご送付ください

送り先: 〒110-0005 東京都台東区上野1-12-6 3F(国際宝石会館)
<難キ連> 難民・移住労働者問題キリスト教連絡会 宛

問い合わせ先: 事務局携帯 090-6012-8252
e-mail: nankirensato@jcom.home.ne.jp



サイディアフラハ 近況報告



この約半年間のサイディアフラハの活動について、現地ケニアでコーディネーターとして活躍しておられる荒川勝己氏の報告を基に、ここにまとめてみたいと思います。

2015年2月28日に、サイディアフラハでは地域コミュニティのためのセミナーを、午前中から3時間ほど、その後に昼食も含めて行いました。この時のテーマは「マイクロ ファイナンス」です。

サイディアフラハは児童養護施設、裁縫教室、縫製工房、幼稚園と小学校を運営している NGO です。ケニアでは成人の病死などにより親のいない子どもが多く、保護が求められています。また未だ男尊女卑の意識が根強くあるため、サイディアフラハでは女の子に焦点を当て、保護者の不在や虐待を受けている女の子を施設で養育しているのです。なぜ彼らのような児童や女性のための福祉を実践する団体が、マイクロ ファイナンスについて、地域の人々を対象にセミナーを行うのか一瞬不思議に思われるかもしれません。

彼らの活動で一番といえる大切なことそれは児童養護施設の運営と維持です。そのことに欠かせないのは彼らが実際に活動する地域の人々からの理解を得ること、保護を必要としている子ども達を、地域で一緒に守っていくという意識を持ってもらうことです。そのことに欠かせないのが、コミュニティを対象とした上記のようなセミナーです。

話が戻りますが、このセミナーの講師は彼らの活動するケニア、キテンゲラ町にあるイクイティー(赤道という意味だそうです)銀行の行員2名に依頼し、お金の使い方や積み立て方についての話がありました。参加者24名からの評価は上々で、このマイクロ ファイナンスをしてみたい、という人が続出し、セミナーの一週間後に再び講師をしてもらった行員に来てもらい、セミナーに参加した希望者に対して手続きをすることになりました。このセミナーは好評につき、再び開かれることになりました。

また5月16日には地域の医師と看護師を講師とした「乳幼児の栄養の取り方、コレラ、マラリヤについて」のセミナーを開催し、成人20名と子ども23名が参加しました。この時期、ケニアは雨季による大雨で、ことにナイロビのスラム地区ではコレラが流行し、死亡者が絶えないため、関心の高いテーマとなりました。これらの活動を通して、一人でも多くの地域の人々がサイディアフラハの活動に共感を持って接して下さることを願ってやみません。

報告者：感謝箱献金事務局スタッフ 相宮 陽子





教区婦人会からの声

日本聖公会婦人会・感謝箱献金は皆さまよりの尊い献金を、各教区婦人会を通して(50%以上)送っていただき、総会・会長会で審議した後、国内外のお献げ先に送金しています。各教区においても教区分の感謝箱献金を独自にお献げしています。このコーナーでは各教区の婦人会長や役員の方に感謝箱の献金先や思いについて、原稿を頂き掲載しています。今号は北海道教区婦人会の沖田京子会長よりメッセージをいただきました。

8

北海道教区婦人会 感謝箱献金をお献げして

北海道教区婦人会 会長 沖田京子

北海道教区婦人会は、2年に一度の総会の年に選挙で会長が選出されます。その任期は1期2年、2期を限度とすると規約に定められています。

北海道教区には24の教会があり、道央、道南、道東、道北と4分区に分かれています。昨年4ブロック集会に副会長と共に出席し、沢山のお恵みと勇気を与えられました。総会は24教会にお知らせをします。教区婦人会に登録されていない教会もありますが、教会での婦人の働きは同じようになっています。各教会の婦人の方々の働きに神様の祝福をお祈り致します。一昨年の9月の総会時に、私は会長として選出され現在に至っております。早いものでこの9月で1期2年となり、今9月に行う総会に向け準備を進めております。

日聖婦には昨年、今年も会長会に副会長と共に出席させていただきました。

感謝箱献金事務局(コア)を担って下さっている委員長・スタッフの方々お働きは、私の考えにも及ばない程の重責を負って下さっていることに心より感謝申し上げます。

北海道教区婦人会は、献げられた感謝箱献金のうち、50%を日聖婦、50%を北海道教区のために使わせて頂いております。金額は少ないのですが、2014年もお献げできました。後者のお献げ先は、①アジア・アフリカ中古衣料送料のため。(札幌聖ミカエル教会)70,000円、②だいに東北(特に福島の子どものため)50,000円、③自立支援ベトサダの働きのため30,000円お献げ致しました。

特に札幌聖ミカエル教会が1991年より送り続けている、アジア・アフリカ中古衣料の発送について書かせていただきます。タンザニヤ、スーダン、ナイジェリア、ウガンダ、ブラジル、ルワンダ等、2014年現在ダンボールで3,033個、金額にして14,656,880円になるそうです。聖公会を通じ、また修道院を通じ送り続けています。

北海道教区のそれぞれの教会も、バザー等には覚えお献げしております。長く続けることは大変です。年々年を重ねて作業もスムーズにいかなくなりますが、待っている方々の事を思い送り続けて下さっています。今年も秋に向けバザーがあります。またお献げ出来るようそれぞれの教会もがんばります。

このように皆様から献げられた感謝箱献金を、大切にそれぞれに献金出来ました事、主に感謝です。

感謝箱とわたし

ウィリアムス神学館 2年 セシリア 塚本祐子

青空に虹の架かった小さな箱を初めて見たのがいつであったかはもう憶えてはおりません。

教会の電話の脇に設置され、電話を借りたときや教会のどなたかから頂き物をしてしまったときなど、「どうしましょう？」と訊くと「感謝箱入れときい」と年配の方から勧められ、いくらか入れていました。感謝すべき相手に返せない場合にその代わりにと納金する格好になってしまい、感謝箱の趣旨を理解していなかったのです。

感謝箱の働きを知るのは随分後になりました。国内外の困難の中にある人々が、人として尊重され自尊感情を持てる生活を獲得できる為の活動が粘り強く継続され、それを支援なさっている事。

『ガリラヤのほとり』を最初に読んだ折り妙に納得がいきました。箱に刷られている虹。大洪水の後、神様がノアと結ばれた契約の証しです。支柱のない橋と呼んだ人もいますが、どうでしょう、虹の端と端はそれぞれ何処に着いているのか私たちは確かめられません。何と何をつないで架かっているのかに想像の余地を残しています。『ガリラヤのほとり』を読ませていただき、箱の用いられる活動が何であるか、用いる方が誰であるかを知れば、これがつながるという事かもしれません。

そこに紹介されている人々は様々な意味でのマイノリティなのですが、しかしそれは私と彼ら彼女らとの相違ではない気がしています。中年、女性、神学生、教会の外側で育った私は教会社会内でマイノリティに分類されるのに充分であり、それは遠い国のその人々との或る種の共通点だと思われまふ。マイノリティは様々な場面で余分に勇気を要するという点であまり有り難い気分にはなりません、けれども物事が別の（或いは新しい）角度から見られるという立場はむしろ恵みと受け取って構わないでしょうか。マイノリティという生き方を共有する遠い隣人が生きている事に箱を見る度思いを馳せまふ。



東日本大震災支援積立金の活用について



日本聖公会婦人会 感謝箱献金では東日本大震災支援のため、2011 年度より「東日本大震災支援積立金」として 5 年間積み立てており、既に南相馬の「原発事故から命と環境を守る会」などにお献げしています。2013 年度より、各教区・教会で被災者を支援するプログラムを実施する場合 10 万円を上限に申請することが可能となりましたので、ご活用いただきたいと思います。各教区の婦人会を通して申請して下さい。

日本聖公会婦人会・感謝箱献金事務局

編集後記

感謝箱献金の働きは 130 年以上昔より日本聖公会の婦人信徒が祈りと共に、献金箱に託した感謝の気持ちを、全国で集められ、施設や様々な活動団体にお献げしてきました。社会の事情は変わっても、この精神はずっと受け継いでいくべきと、微力ながら努力を続けております。

今年も各教会で集めて下さった感謝箱献金は教区婦人会で集計し、教区独自にもお献げされておられますが、50%以上は日本聖公会婦人会にお送り下さいました。その感謝箱献金は、今年も会長会(各教区代表者 10 名と日聖婦会長)の承認をもって、国内外の「社会の中で生命や存在を危うくされている人」「特に女性や子どもたちの自立を目指す」ための働きにお献げすることが出来ました。お祈りをもってお献げして下さいる全国の婦人会の皆様、教区婦人会の役員に大きな感謝とともに、今後ご理解、ご協力賜りますよう、お願い申し上げます。(Y・古谷)